

都市も球を維持することで永遠に生き残れるのかもしれない。球を微分すると円環が得られるが、カンパネッラは一個の円に生命を授けて象徴にまで高め、そのアナロジーを増殖しつつづけていったのではないだろうか。

4 カンパネッラの地動説

ガリレオとの出会い

一五九九年九月、トンマーズカンパネッラは、反教会、反スペイン主義を標榜し、理想主義的な国家建設を企図した革命をみずから主導した。しかし蜂起は失敗に終わり、カンパネッラは逮捕されて、以後一六二六年までの都合二十七年間の牢獄生活を強いられることになる。この革命蜂起のときに構想された都市国家像が、『太陽の都』に描き出された。以上のことはすでに述べた。

彼はこの革命において自分をあくまで預言者として位置づけていて、裁判でももっぱらそれを強く主張したが、受け容れられなかった。獄中では独房のわりに火を放って狂人を装うことで死刑をまぬがれようとしたり、へんげの刑も含む苛酷な拷問にも必死で耐え抜いたりした。

軟禁状態のときも含めて、とにかく彼は著述に専心したと伝えられ、全生涯を通じて遺された書物は八十八巻にも及ぶと言われている。論理学、形而上学、自然学、神学、魔術、医学、経済学、言語学、歴史学等、その著述範囲も広く、大半が獄中時代に執筆されたものなのである。

これから扱う『ガリレオの弁明』*Apologia pro Galileo* (一六一六年)もその中の一冊である。

一六〇八年から十四年まで、カンパネッラはナポリのカステル・デル・オーヴォの牢獄に軟禁され、訪問客とも応接できる状態にあった。だが十四年十月、狂人であるはずのカンパネッラの様子があまりにも正常すぎるので、聖エルモ城の牢獄に移され、四年間に互るみじめな生活を送るはめになった。

こうした苛酷な事態の中でも彼は筆を折らずに書きつづけ、神学をはじめとして修辞学、詩学、医学、弁証論、占星術らの著作を著わした。この時期のカンパネッラに外部から書物は与えられておらず、自著への引用はすべて記憶に恃まざるをえなかった。

『ガリレオの弁明』もこの時期の所産なのである。

ガリレオとは一五九二年北イタリアのパドヴァではじめて出会っている。

この年二十四歳のカンパネッラは、所属するドメニコ会から、異端的な自然哲学者テレジオの見解を放棄して滞在中のナポリを一週間以内に離れ、アルトモンテの修道院に戻るよう言い渡されていた。というのは彼は二十歳のときにベルナルディーノ・テレジオの『事物の本性について』*De rerum natura iuxta propria principia* (一五六五―八五)を読んで決定的な影響を受け、それ以後テレジオの信奉者となっていたからである。

テレジオの哲学では、自然界のあらゆる物に生命が宿り、それぞれそれなりの感覚が付与されている。森羅万象で起こる現象は、太陽からもたらされるへんげと、大地からのへんげとといった、二つの相対立する力のせめぎ合いによると考えられた。

アリストテレス的な宇宙(自然)解釈を正統としていた当時のカトリック教会にとって、テレジオ的解釈は当然異端として映るわけで、この思想を引き継いだカンパネッラが異端視されるのは成り行き上あたりまえのことだった。

一五八九年カンパネッラは、テレジオの反アリストテレス主義を擁護する『感覚によって確証された哲学』*Philosophia sensibus demonstrata*を書き、二年後の九十一年に上梓したほどであった。

こうしたカンパネッラであるから、ドメニコ会の仲間とうまくいくはずがなく、ついにナポリ滞在中に獄に捕えられてしまったのである。そこで彼は前述のように、アルトモンテの修道院に帰るよう勧告されたのだが、結

局従わずに北イタリアへと放浪の旅に出してしまう。

パドヴァまでやってきた彼は、ガリレオ（九月にパドヴァ大学数学科正教授に就任、当時二十八歳）やその友人のパオロ・サルピと親交を結び、自然科学的及び実験尊重の態度を身につけながら、一年間を自由に過ごした。一六一〇年ガリレオの『星界の報告』*Sideriens nunciatus*が出版されると、カンパネッラはテレジオ派の友人アントニオ・ペルージオから九箇月遅れで入手して、獄中で熱中して読んだ。そして読後の感動と不満とをラテン語でガリレオに書き送っている（一六一一年一月十三日付書簡¹⁰⁰）。しかしガリレオから返事は来なかった。なぜガリレオは返事を書かなかったのか——その理由というのが、カンパネッラとガリレオを分かつ、また先取りして言えば、『弁明』の方向性を示唆する要因とも重なっていく。

ガリレオの方は一六一五年十二月にローマの検邪聖庁に訴えられ、コペルニクス説の放棄を言い渡された。翌十六年ベッラルミ枢機卿はコペルニクスの宇宙観の禁止を準備した。カンパネッラはこの話を耳にはさみ、同年夏に『弁明』を執筆したが、当局の受け答れるところとはならなかった。

『ガリレオの弁明』の成立

当時、『星界の報告』が出版されたのち、一六一五年頃までには、天体が不変的な天体的エッセンス（エーテル）で成立しているのではなくて、少なくとも地球上のそれと比較できうる自然物質で成立していることが証明されており、地球が惑星で天を動いていて、太陽も地球同様自転しているとみなされていた。

しかし視差の問題が、地動説を確固たる説にするのをさまたげていた。コペルニクスの理論は証明されたわけではなく、ライバル的な諸説の中でひととき有望なだけであった¹⁰¹。

こういう新たな宇宙観に対してキリスト教の側の反応はどうだったかという点、好意的というよりもむしろ攻撃的な態度で臨んできた。

ちょうど運悪くカトリック側は、十六世紀の後半の四分の一世紀から教会内でのイエズス会の勢力が強くなりはじめた時期で、対抗宗教改革の嵐が昂まりつつあった。ちなみに、一六一六年二月には、コペルニクスの天文学への非難が公式に発表されている。

プロテスタント側の反応はカトリック側より熾烈をきわめ、マルティン・ルターはコペルニクスを「天文学という学問全体を覆」そうとしている痴れ者とさえ叫んだ¹⁰²。

新旧両派とも反駁の理由は、『聖書』に記されている宇宙像についての言葉と、コペルニクスの宇宙観が決定的に異なるからで、結局論争は聖書の解釈へと進展して行かざるをえなかった。カンパネッラも当然この事実を三を向けていて、『弁明』の序文にも、「それゆえ疑念は」として、「ガリレオの支持する理論が『聖書』にふさわしいものか、反するものか」と書いて執筆のモチーフを明らかにしている。

そしてこの疑念を解消するために、カンパネッラは一方的にガリレオを擁護するのではなくて、次に記す骨子¹⁰³にも明らかのように、親反両派の主張を公平に取り上げ、さらに自分の思想を織り込みながら彼独自の結論を導き出すに至っている。

『ガリレオの弁明』骨子¹⁰³

序文	
第I章	反ガリレオ説
第II章	親ガリレオ説
第III章	IV、V章の回答を導くための、三つの主要な前提条件
第IV章	反ガリレオ説への回答

第V章 親ガリレオ説への回答

上記のように全体は五つの章に分かれていて、I章とIV章（この組合せをいまAとする）、II章とV章（この組合せをいまBとする）とが対になっていて、III章（Cとする）にカンパネッラの思索性、思想性が打ち出されている。

これからA、B、Cをそれぞれ少し詳しく紹介、解説しながら、『弁明』の全体像を浮き彫りにしていきたい。

A 第I章と第IV章（反ガリレオ説とその回答）

第I章は十一條の論題 *argomento* に分かれている。それをテ・マ別に分類すると、一、二、の論題はヘガリレオがアリストテレスの教説とは正反対の意見を述べていて、教父や聖トマストマスの教えにも反するVという内容となっている。カンパネッラの筆致を知っていたただくためにも、いまその一と二の邦訳（拙訳）を掲げてみよう。

一 まずガリレオに反駁する者は、ガリレオが従来の教説を根本から覆そうとしていると思っっている。なぜならガリレオは、聖トマスやすべての学者が神学的教義の論拠としている、アリストテレスの自然学や形而上学に逆行する新説を紹介しようとしているからである。

二 さらにガリレオは、あらゆる教父や学者たちの考えと矛盾する見解を支持している。実際彼は、地球が動いていて宇宙の中心には存在しないこと、太陽と星が不動であることを教唆している。これは教父学者たちの見解に反するものであり、われわれの肉眼でも異なっていることは立証できるのである。

次に三から九まで、そして十一は、具体的に『聖書』の教えに反している例を、『聖書』から引用しながら展開している。十は、ガリレオの考えは、学者たちが学生に教えている天体と地球の理論と相反するので、必然的にスキャンダルを産み出さざるを得ないと述べている。

以上に対して第IV章では、それぞれ各論題についてわりと長めの解答がつけられている。たとえば一に関しては、「ガリレオは信仰の原則に悖ることはしておらず、直接の観察結果に言及しながら節度を保って自然界の事柄を語っているのであって、アリストテレスが想念だけで意見を述べたのとはすでに性質を異にしている」

二については、「……感覚的な経験で自己の理論を証明するガリレオにとっては……」とある。

一、二の回答から判ることは、(一)ガリレオがカトリックの信者として決して破門されるべき人物ではないこと、(二)ガリレオが常に、観察結果を見解の根底に据えている事実を、カンパネッラがきちんと理解して訴えていることの二点である。これは自然界の諸物にそれなりの感覚が付与されていると見て、感覚知を尊重するテレジオの神学の継承者であるカンパネッラにとって当然の認識だと言えよう。しかしよく考えてみれば、こうして感覚的知（経験的知）を重んずることは『聖書』の權威を貶めることにつながると思われる。だが、死ぬまで敬虔なカトリック教徒であることを任じたカンパネッラにしてみれば、『聖書』はいぜんとして神学的真理の根拠であるにちがいがなかった……。

B 第II章と第V章（親ガリレオ説とその回答）

第II章も第I章同様十一條の論題に分かれており、コペルニクスの『天球の回転について』の支持者たちの実例を挙げながら、ガリレオを擁護している。たとえば……

一 地球が動いて、太陽が宇宙の中心に在ることはすでにコペルニクスが述べており、ガリレオの新説ではない。コペルニクスの説がカトリック信仰を穢していないのなら、ガリレオの説もそうである。

六 ガリレオの教説（地球の自転、太陽中心説等）は古代にすでに存在していた概念で、モーゼやピタゴラスに端を発している。

二 聖ユスティニアヌスの『正統とは何か』には、クリスチャンと異教徒が天の形について論争した際、異教徒は天が球形で動いていると言ひ、クリスチャンは丸天井の形をしていて不動であると主張した。教父たちは、天球が静止しているがゆえに、まさに「firmamento」と名づけている。

このほかの項目では『聖書』をいちいち引用してガリレオ説の是であることを述べ、第V章でそれぞれについて回答を行なっている。

その第V章の冒頭に前置きめいた文章が載っていて、カンパネッラがガリレオ説を支持するに至った屈折した経緯が粗描されている。この箇所はひじょうに興味深い一節であり、カンパネッラの思想性を探る優れた手掛かりとなる部分でもあるので、後で紹介、詳述したいと思う。

C 第三章 IV、V章の回答を導くための三つの主要な前提条件¹⁷²

第三章の構成は次のようになっている。

・ 第一の前提とその証明

・ 第二の前提（六条に細分）とその証明

・ 第三の前提とその証明

・ 結論

この章にはカンパネッラの思想が論理的に展開されていて、この『弁明』の思想的価値を具に窺い知ることができる。前提 *Premessa* を挙げて証明 *provare* を行なう論法だが、証明の箇処にはカンパネッラの博識が披露されていて驚くばかりである。他の章と同様、おおかたが『聖書』からの引用で占められていて、この『弁明』がカンパネッラ一流の聖書解釈の小冊であることは明白だと考えられる。またトマス・アキナスの『神学大全』、聖アウグスティヌスの『神の国』よりの引用もあって、カンパネッラの思想の脈流を研究するうえでも貴重な資料となるであろう。

しかしいまはそこら辺には立ち入らずに今後の大切な研究課題に取って置くことにして、カンパネッラの（科学的）知の方向性について考えを深めていきたいと思う。

そこで第一の前提から順にその内容を要約していくことにしよう。

・ 第一の前提

これまで述べてきた問題に決着をつけるために議論参加者は神への熱意 *zelo di Dio* と学識 *scienza* を同時に所有せねばならない。つまり、宗教心のない学者は現世での地位に目を奪われて真理や正義のために闘わない。逆に、宗教心はあるが無知な者は、形式主義者となり、人の知らない事を言っ神を崇拜させようとする。

・ 第二の前提

① 神学者は、天文学や物理学を等閑してはいけない。

② 哲学は天文学を深めるほどには熟してはいない。

③ 『聖書』の教えは良い生き方をするため、また超自然的な教説に向けられたもので、天文学的な理念を対象にしてはいない。なぜなら「伝道の書」（第三章、十）にもあるように、神は世界を人間の研究に任せ

られたのだから。

④ 哲学や科学の研究をキリスト教徒に禁ずるものは、事実上、キリスト教徒であることを自らに禁ずることとなる。なぜなら、唯一真実の宗教であるキリスト教は、科学的探究によって明らかになった誤謬を認め、のびくびくしてはならないからだ。

⑤ 合理的立論と聖書に基づく資料を闘わせ、ある哲学の誤りを証明するために用いている者は愚かである。

⑥ 誤っていて疑わしい命題も、『聖書』と矛盾していなければ、必ずしも異端ではない。また誠実な意図で真理を求めている人を非難してはいけない。

・第三の前提

自然とは神の書であって、『聖書』と比較できるはずがない。

・結論

聖ベルナルドが言っているように、学識なくも神への熱意のある者も、神への熱意なくも学識ある者も、この種の問題を判断することはできない。学識と神への熱意がともに存在することが必要であり、それによって、「人間にはなく神への栄光が掻き立てられるべきなのである」*si deve agire a gloria di Dio e non dell'uomo.*

さて、以上がカンパネッラのガリレオを弁明するための知的・思想的前提条件になるわけであるが、ここにコペルニクスの天文学（を支持するガリレオ）を教会の破門から防ぐ目的で書かれた作品である『弁明』の性格が明らかになっていることが判る。なるほど、『弁明』は科学技術の具体的進展、精神的・知的進歩の推進についてなんら積極的な意見を述べていないが、第三章の前提を読む限り、またその他同章や他章にちりばめられた断片的な見解（後述）を読む限り、カンパネッラが知的進歩の可能性を必然的によしと見なしていたことが判読される。

まとめてみると、ガリレオの説を弁明すること、つまり『聖書』の權威をある程度解体していかざるをえないことは、次の二点を導き出す結果になるのではないだろうか。

(一) 経験的認識の尊重

(二) 知は進歩するという思想の是認

そして『弁明』は十七世紀初頭という新旧両思潮がせめぎ合う時代的狀況にあって、この二点においてきわめて画期的な書物と言えられると思われる。

(一) の経験的認識の尊重というのは、ルネサンス思想の中の重要な要素のひとつであり、レオナルド・ダ・ヴィンチにすでにその萌芽は見られ、コペルニクスやテレジオ、それにカルダーノ、ケプラーを経て、ガリレオに至って物と物との関係を数量化するまでになっている。実験的知・観察的知を尊重して近代科学の先駆となった認識論である。

知覚を通して入ってこない思想など人間の心の中には存在しない、というのはスコラ哲学の原理で、この原理は経験的認識論の発達に十分な素地を与えていたわけだが、中性のスコラ哲学者はこれを活用するよりは無視する方が多かったし、中世の啓示的な教会の性格にあっては、効果的に用いることは不可能であった。

ルネサンス後期になって、ダイナミックな経験的認識論が生じてくる原動力は、したがって突然興ったものではなく、こうした文脈の中で、教会の啓示的なヴェールが剥ぎ取られていく経緯と重複したと言えるであろう。裏を返せばそうした力を促したのは、教会の精神的權威の失墜と科学的精神の進展であり、それはとりもなおさず、聖書神学やアリストテレス哲学からの解放を意味していた。

カンパネッラの場合は、前述したように、『聖書』はいぜんとして神学的真理の根源であり、さらに神学的証明は『聖書』を真理の曲解より守ってくれるものと考えられていた。つまり、彼にとって科学と宗教はあくまで

相互補完的なものであった。

『弁明』の中で彼は述べている。

- ・「ガリレオに誤りを認めることはできない。というのも彼はでたらめの意見を並べているのではなく、宇宙という書物に Libro del mondo の中での実験的な観察に基づいて見解を述べているからである。彼は危険を冒して、信仰の根拠として自己の理論を提出してはいない」(Ⅲ、二一六¹⁷³)
- ・「われわれは(ガリレオの発見によって)『聖書』を、歪曲や暴力や捏造に訴えずとも解釈できることを知った」(Ⅳ、九¹⁷⁴)

宗教と科学へのこうした見方は、カンパネッラにすれば、自分の拠って立つ宗教を否定せず、さらに新思潮に乗り遅れないためにも妥当な主張だと言えるであろう。幸い彼にはテレジオの影響を受けて、 \wedge 感覚的知 \vee L'esperienza dei sensi を受容しうるだけの素地があったわけで、ガリレオ的知(この場合、観察的な経験知)にも抵抗はなかったのである。

ところで、こうした経験知の台頭に(Ⅱ)の進歩の思想の展開が関係していたの言うまでもなからう。カンパネッラはトマス・アキナスを敬愛していたが、『神学大全』の中に、やはり知の進歩の記述が見られる。即ち、一人間の理性は不完全から完全へと徐々に進歩するのが当然と思われる。かくて、思弁的な学問において私たちが、初期の教父たちの教えが不完全であり、後日、後継者によって完成されたことも判っている。これは実用的な問題にもあてはまる」。(第二章、一―九十七―一)

『弁明』の中でカンパネッラは述べている。

- ・「それゆえ知は、神の書の中であまねく読み取れるが、神の書とは宇宙であり、そこではいっそうの真理が発見されるであろう」(Ⅲ、四¹⁷⁵)

・「新しい知識を発見することをめざす研究を認めるばかりでなく、古いものを訂正することを認めるのは、キリスト教という宗教の、他宗よりも優れた栄光である」(Ⅲ、四¹⁷⁶)

上述の「新しい知識の発見」が、言うまでもなくガリレオによる諸発見を指している以上、カンパネッラによって押し進められかつ支持された、知的精神的進歩の理念は、この時期の科学的動向に關係していたことが読みとれる。言い換えれば、カンパネッラは宗教的知的進歩を支えるうえで、自分自身の精神性の基盤である(中世的な)教会の信念と、近代的な科学運動の先駆的業績を結びつけたことになる。これはもちろん宗教と科学を相互補完的に捉えた思考性と表裏一体をなしている。しかし彼は、こうしたことを主張するうえで、その論拠をダビデや預言者の言葉に求めて地動説にあてはめようとしたので、教会側から非難された。それは『弁明』の執筆のモチーフが、あくまで表向きにはガリレオを破門から救うものであり、そのために宗教と科学の相互補完説を提出したからであろう。そして『聖書』をカンパネッラは彼なりに絶対視している以上、宗教的な信仰記述を科学的な観察結果に符合させようとしたのは当然と言えよう。なぜなら、カンパネッラが『聖書』に \wedge 科学

\vee を求めたかどうか判然としないものの、彼の内部で、やはり『聖書』の權威の危機が萌していたのではないかと推察されるからである。『聖書』も科学であると多少とも弁明できれば、『聖書』は延命 \vee できるのであり、それはつまりカンパネッラの思想的生命の延命でもあるわけなのである。ある意味でカンパネッラは、 \wedge 補完 \vee というよりも、無理無体な \wedge 融和(折衷) \vee を行なったと言った方がよいかもしれない。

無理無体と表現しはしたが、これは宗教と科学は別仕立てのものであるという考えに立って話を進めてきたか

心で、カンパネッラの内部ではおそらく、この異質な \wedge 精神 \vee と \wedge 知識 \vee を前にして、好奇心と躊躇の両方が同等に生じ、 \wedge 知識 \vee の重さや新鮮さに圧倒されながらも、 \wedge 精神 \vee の絆を断ちがたい思いが湧き、分裂と不安に見舞われたにちがいないと思われる。

これは繰り返すが、たまたま彼がテレジオの感覚知の影響を受けた \wedge 近代人 \vee だったからでもある。

まとめてみると、カンパネッラは、神学的理性と科学的理性の間に潜んでいた避けられない闘いをいちはやく察知し、それを、スコラ的アリストテレス主義の人為的ドクマと袂を分かつことによって克服しようとした、と考えられる。

『ガリレオの弁明』の視点

ところで、いままで見る限りカンパネッラは時代の制約を受けながらも、当時にあつては、頭ひとつ抜きん出た傑物であることは間違いないであろう。おおかたの哲学史によればカンパネッラという人は、独自の哲学的体系を発展させたのではなく、他の思想家の思想を脚色し敷衍したとして批判されるが、彼の苦難に満ちた生涯や十七世紀のはじめの四半世紀という混乱した時代背景を考慮に入れるならば、体系化などは根本的に無理とみなした方が適切だと考えられる。

そうは言うものの、『星界の報告』についての読後感を記した書簡(一六一一年一月十三日付)を見ると、カンパネッラは、われわれが哲学的体系の基礎と名づけてもよいものを早い時期に案出していたのではないかと推察される。というものの、書簡には、ガリレオの新発見、新説に動揺し、反駁せんとする姿が表出されているからである。カンパネッラは、『星界の報告』の斬新さに対して、懸命に自己の思想の建て直しを図ろうとする。

その必死の努力は、『弁明』第V章の冒頭に率直に記されていてきわめて興味深い。以下少し長くなるが、引用してみたい。

ガリレオに好意的に提出されたあらゆる議論に、今日反論を加えるのはきわめて困難であると思う。実はここ数年私も、天が火で成り立っていると信じていたし、天にはあらゆる火の源があり、星も同様に火で出来ていると考えていた。これは私がアウグスティヌスやバジリオ、その他の教父たち、さらに私と同郷のテレジオの最近の見解と意見を同じくしていたからで、そのため私は、拙著『自然哲学問題集』や『形而上学』の中で、コペルニクスやピタゴラス学派の人たちの議論にすべて反駁しようとした。しかし新星や、月の軌道彼方の星空に出現した彗星、それに太陽の周りの黒点の発生を証明するティコブラエーとガリレオの観察結果を知ると、天や星は全部が全部、火ではないのではないかと懸念が生じつつある。なぜなら、月や金星の満ち欠けの段階や、その二つの星の表面の染みによって確信が持てるように思われるからだ。とはいふものの、星がどうして一瞬間に何千マイルも移動できるのか、という不可解な問題が、たとえ解決の方法が見いだされても、私には疑問として残されている。さらに木星の周りを巡るメディチ星、土星の周りを回転する星が存在している以上、『自然哲学問題集』の中で提起したような、愛の中心たる唯一の地球の存在はおそらく認められまい。他の惑星とはほとんど同一の恒星の様相を考えるにつけ、太陽多数説についてのガリレオや他の学者たちの見解に私は納得できない。それゆえ、私は賛否の選択を中止して、ガリレオの議論に答え、教会の判断や、私よりこの件にずっと詳しい人の判断を待つつもりである。¹⁷¹

経験的知、進歩の思想、宗教と科学の相互補完など、『弁明』の中で画期的な認識を示したカンパネッラだが、究極においてテレジオの哲学を脱皮し切れないでいる。

宇宙観について言えば、天動説への拘泥である。『星界の報告』が発表される以前の(そしておそらくそれ以後も根本的には変化はないと思われる)カンパネッラの宇宙観は宇宙の中心に、暗くて湿気を帯びた、寒くて不

動の、冷である地球を置き、地球の周りに、明るくて乾いた、灼熱の不動の太陽の軌道があるというものだった。この宇宙観を軸に哲学体系を構築しようとしていたと思われるカンパネッラは、コペルニクス説によっておそらく、内的秩序が覆されるほどの危機に陥られたことであろう。さらに、友人ガリレオの大好評の著『星界の報告』で二重の打撃を受けたにちがいない。前掲の一九一一年一月十三日付ガリレオ宛書簡でも、「確かにコペルニクスもティコも他の誰も、同じような報告をこんなに迅速に書かなかったであろう」とガリレオを礼賛し、さらに新しい発見による伝統的な体系の転覆によって、新旧の数多くの問題が持ち上がったものの、ガリレオがかくも私欲を殺して自説をものしたことは、ガリレオ当人の名誉を奪う恐れがある、ともカンパネッラは書いた。しかし書簡に支配的な雰囲気は、宇宙観の新時代に対するカンパネッラの心理的動揺なのであった。

同書簡には、宇宙（天体の運動）の原動力 *anima origenica* を問いかけ、なぜ恒星天球は不動か、星の光は何によるかを疑問として提出する、疑問符を書きつらねた神経過敏とも思える文章が見受けられる。

彼は結局、形式上宇宙の中心に太陽へ熱Vを持ってきて、その周りに地球へ冷Vを置いた。そして太陽に、生命を維持できる熱と周りの惑星を動かす原動力を付与した。太陽の自転もこういう形で理解した。

すでにお判りと思われるが、この発想はテレジオの生命主義的な有機的一元論の枠を超えておらず、太陽の自転についての上記のような考え方は、カンパネッラが熱狂的に支持したテレジオの名著『事物の本性について』のII-十九においてすでに述べられていることでもあった。

さてガリレオは、『星界の報告』の読後感・疑問点を綴ったカンパネッラの手紙に返事を書かなかった。カンパネッラはなぜ返事が来ないのか不明のまま『弁明』を書くことになるのである。この間カンパネッラは、記録として残っている分ではガリレオに手紙を一通だけ書き送っているが、リンチェイ学士院長フェデリコ・チェジイにも書簡は出していたらしく、チェジイからガリレオ宛一九一三年九月六日付書簡には、「カンパネッラが：貴兄（ガリレオ）の論文を考察する時間を持たなかったのは疑いない」と述べられている。そしてこのきわめてカンパネッラに対して好意的な扱いかと思われるチェジイの書簡には、カンパネッラとガリレオとの交友をなんとか無難に取り持とうという配慮が見受けられる。とにかくガリレオが返事を書かないので、カンパネッラは悶々としてチェジイに訴えるわけなのである。

記録に残されている、この間のもう一通のガリレオ宛書簡の前半分でカンパネッラは次のように書いている。

「世界の哲学は今日、すべて貴兄の筆にかかっております。なぜと申しますに、実際、貴兄の研究に待つところとなっております、宇宙の構造についての正確な体系化がなされなければ、哲学することは不可能だからです」

とついにガリレオを持ち上げるに至っている。この頃すでにカンパネッラは、ガリレオが破門される恐れのあることを聞き知っていたらしく、前出の書簡にも、弁護のためなら論陣を張る覚悟のあることを示唆している。

いずれにせよ、『星界の報告』読後のカンパネッラの動揺、『弁明』を書くまでのガリレオとの交流は興味のないものがある。

さて、ガリレオが返事を書かなかったのはなぜかを、ここで考えてみなければなるまい。もう回答はおおよそ出ていると思う。つまり、数学的に天体の運動を説明しようとしているガリレオに対して、カンパネッラは、前述のように、宇宙の原動力である「根源の霊」*anima origenica* 等を持ち出してきて、形而上学的に掌握しようとしているわけなのである。同じ発想の土俵上の論敵ではないカンパネッラに、ガリレオは返事を書く術はなかったと考えられる。

カンパネッラにははっきり言って数学的思考が欠けていた。彼の世界は、靈的、預言的、象徴的なものであふれかえっていた。

カリレオが科学的真理の探究を意図したのに較べ、カンパネッラの方は、神意による世界統合を考えていたの
である。

『弁明』の中で何度も経験知を尊重するカンパネッラ それじたいに異議をさしはさむ気はなく、むしろ
特筆に値もしようが、カンパネッラの場合は純粹な経験知にとどまらず、自己の形而上学的思考の糧に用いたと
考えられる。悪く言えば、カンパネッラの本体はあくまでレジオ的な、神意へとしか発展しない処にあるのに、
『弁明』執筆の上でカリレオの数学知に便宜上乗りかかっていただけなのではないだろうか。

こうしたアクロバットの行為は無謀としか言いようがなく、その要因をカンパネッラの大胆で自己撞着的な思
考性に求めるのは簡単かもしれないが、どことなしに哀感を誘わざるをえない。そしてそこに中世的十字軍の精
神を読み取ることも可能ではあり、カンパネッラの限界と断ずることもできるであろう。

しかし、新旧二つの知的潮流に棹をさすのではなく、自己の内部で身を以て具現しようとしたカンパネッラと
いう人物、またそうした知が出現して来ざるを得なかった時代的情況を考慮すると、興味の尽きないものがあり、
性急な結論は慎まなければならないと思う。